

澁川一流柔術  
無雙神傳英信流抜刀兵法  
大石神影流剣術

# 貫汪館会報

第80号

発行 貫汪館  
発行日 平成二十六年九月三〇日  
森本邦生  
広島県廿日市市宮内一四八〇

## 平成二六年貫汪館特別講習会(夏合宿)

今年、七月一九日(土)～二一日(月)にかけて、貫汪館特別講習会が行われました。去年は島根県の国立三瓶青少年交流の家で行われ、今年はその本部道場のある広島県廿日市市で行われました。当日は、本部道場の門弟はもろんの事、各支部の支部長・門弟があつまり、技の向上はもろんですが、それ以上に交流を深めました。

(文責 片岡 潤一)

### 「貫汪館特別講習会に参加して」

中西 有希奈

平成26年7月19～21日の3日間、特別講習会が行なわれ、私は初日と3日目に参加しました。

1日目は無雙神傳英信流抜刀兵法の講習会でした。先生は礼法や基本的な動作などを細かに説明されておられました。私は刀を用いての稽古が浅いため、相手をイメージすることが苦手ということに気付かされました。稽古は一人でやるものだとすると、その動きの本質や実践を考える際には必ず対峙している相手というものを考えなくてはならないと思いました。相手の存在を感じ取れない動きはただのわがままな動きとなってしまう。相手を感知するということは無雙神傳英信流抜刀兵法のみの概念ではなく、他の武術でも必ず必要であるものです。

また講習会の後、森本先生による座学が行われました。

「撃つべきとき」という内容でした。撃つべきときというのは相手に隙が生じたとき。では、相手に隙が生じるのはいつであるか。そんなことを考えさせられました。これも私により一層相手のイメージをしながら稽古に励まなければならぬと思わせるものでした。

3日目は澁川一流柔術の講習会でした。六尺棒、半棒、鎖鎌、懐剣を使用した様々な稽古をさせていただきました。中でも鎖鎌というものに苦戦しました。鎖鎌だけ分童と鎌の間が、鎖を模した紐で繋がれているからです。決まった動きをしない紐というものにとらわれ、本来の自分を中心とした動きではなく、見てくれだけを追った動きとなってしまうがちな鎖鎌をとて難しいもののように感じ取れました。しかし参加者の中には抜刀術、剣術などの様々な武術に触れ、自身を高めておられる方々はこの鎖鎌を苦とはしていないようでした。様々なものを稽古しておられる方はその武器が扱ったことのないようなものでも、それも、それを正しく、自分の体の一部として扱うことができるようです。鎖鎌だけでなく、この日の他の稽古でも無理無駄のない動きをされていたように感じました。

3日全ての講習会に参加することはできませんでしたが、多くのことを学ぶことができました。私も偏りなく稽古していかなければならないな、思ったのが本音です。



(特別講習会 稽古風景)

### 宍戸司箭社上納演武会

平成二六年八月九日(土)、安芸高田市甲田町上甲立にある「宍戸司箭神社」において、兵庫県姫路市で貫心流剣術を稽古されておられる貫心流至誠会の方々の主催で、奉納演武会が開催されました。貫汪館は共催と言う事で、貫汪館で稽古をされている三流派、居合・剣術・柔術を演武致しました。

貫心流至誠会からは七名が、貫汪館からは森本館長・竹本師範・竹本治恵・片岡潤一・竹林哲也の五名が演武致しました。

宍戸司箭神社は、もとは山城と言ふ事もあり小高い山の上にあります。当日は台風の近づくあいにくの天気でしたが、数十名の方々が見学に來られ、宍戸司箭の見守りの中での奉納演武となりました。



奉納演武の内容は、初めに、森本館長と竹林哲也による居合(詰合)が行われ次に、貫心流至誠会による居合九本・柔術(竹本師範・竹本治恵・剣術(森本館長・片岡潤一)・貫心流剣術奥之形(貫心流至誠会)と続き、最後に貫心流至誠会の方が貫心流剣術小太刀之形五本を演武され、無事に奉納演武会は終了致しました。

当日は氏子総代をはじめ氏子の方々に準備などをして頂き滞りなく終えることが出来ました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

(文責 片岡 潤一)



### 広島市戸山公民館講演会 「宇高宗助と難波一甫流について」



## 広島市戸山公民館講演

平成二六年八月二三日(土)、広島市安佐南区沼田町大字阿戸にあります広島市戸山公民館において講演テーマ「宇高宗助と難波一甫流について」と題し戸山民俗資料館共催のもと森本先生の講演会が執り行われまし

た。当日は連日の激しい雨とはうって変わり晴天に恵まれ、当初予想していた来場者を大きく上回る80名の方たちにお越しただき、たいへん盛大な講演会となりました。

講演はパワーポイントによりスクリーンに映し出された資料を中心に、時より実演を交えながら進められました。資料説明では広島藩の主な武術流派を説明がなされ、武術の大別から難波一甫流は柔術に分類されることを説明され、難波一甫流とはどういった流派であったのか、また阿戸の地域にどう根付いていったのかなどの説明がなされてまいりました。講演と同時に森本先生が事前にご用意されていた門人帖を会場の方々に回覧されていきましたが、お越しただき

いた方のなかに「祖父の名前が

に至るまでのお話をいただくことができ、その当時の方たちのレベルの高さにも阿戸神楽をされているという若い方との出会いや宇高家の方もお越しになっており、ご自宅にまでお招きいただき感謝のお言葉を頂戴するなど手厚いお招きをいただき成果の大きい講演会となりました。

(文責 竹林 哲也)



(宇高先生之碑)

### 日本武道学会第四七回大会 〜濹川一流柔術公開演武〜

平成二六年九月一〇日(水)・十一日(木)の両日、広島県福山市の福山市立大学において日本武道学会第四七回大会が開催されました。貫汪館は森本館長が日本武道学会に所属されており、毎年研究発表をされており、また、広島県廿日市市で稽古を

しているというご縁もあって広島古武道である「濹川一流柔術」を演武することとなりました。

公開演武は一〇日(水)に行われ、午前中は学会の先生方の一般研究発表、その後、一五時から公開演武となりました。会場には約二〇〇人の学会の先生方が居られました。学会の先生方は多くの方々が

武道経験者であり高段者の方々ばかりです。その様な、観る目を持った、厳しい目の中の演武となりました。

公開演武は森本館長をはじめ竹本師範・竹本治恵・片岡潤一・竹林哲也・中西有希奈の6名で行いました。はじめに、森本館長より貫汪館で稽古されている三つの流派の紹介、貫汪館の活動の紹介、そして、今回演武を行う「濹川一流柔術」の歴史・時代背景・伝承・実技の説明がなされ、その後公開演武となりました。

実技演武は、初めに稽古をする「履形」などの基本の形からはじまり、本来柔術が目指すべき刀などの武器に対処することが出来る様になるための稽古体系を、順を追って行い一つ一つに説明を加えながら行われました。また、最後には濹川一流柔術に伝わる鍛錬法の中から、「棒抜け」「笛止め」を行い、学会の先生方からの暖かい拍手の中、公開演武は終了となりました。

公開演武終了後には、学会の先生方より、たくさんのお褒めの言葉と感想を頂戴いたしました。そして、私たちの演武を見て少なからず古武道に対するイメージが変わられたのを感じる事が出来ました。なお、日本の伝統文化である古武道を正しく広める為に少しでもお手伝いできればと貫汪館は考えております。今後ともこの様な活動を続けることが出来ればと考えております。

最後に、今回この様な場を与えてくださり、ありがとうございました。先生方、そして当日いろいろとお世話くださいました学生の皆様はこの場をお借りいたしまして感謝の意をお伝えいたしたいと思います。有難うございました。

(文責 片岡 潤一)



### 貫汪館平成26年度秋季昇段審査会

平成二六年九月二一日(日)に大野体育館武道場において、秋季昇段審査会が開催されました。以下は今回初段を受審された若狭君の感想です。

平成二六年九月二一日(日)、広島県廿日市市大野体育館にて平成二六年度秋季貫汪館昇段審査会がありました。私個人としては入門して初めての昇段審査会でした。私は、今回濹川一流柔術の初段を受審させていただきました。

審査に對しましてはとにかく今までの稽古で身に付けてきた動きを素直に出せるように取り組ませていただきました。しかし、昔から緊張に弱い性格を持ち合わせておりますので、自分で「あれ？いつもと何か違うぞ？」と思うようなところどころあったりして内心ではあたふたしてしまいました。審査の途中で心と呼吸が乱れたことを自覚できたのでそこを意識して今後は稽古していきたいと思えます。また、審査後に先生から「講習をいただきましたので、今後の稽古に繋がる課題も見つけられました。」

閉会式にて、竹本先生から合格者の名前が読み上げられ、自分の名前も読み上げていただくことができました。入門して初めての段位でしたのでとても嬉しく感じ、審査が終了したあとはすぐに武器のお店に行き、黒帯を注文させていただきました。しかし、白帯から黒帯になりましたので、今後の演武などの場におきましては一般の方々や他流派の方々からの見方がこれまでとは変わって来ると思いますが、現状に甘んじることなく、より一層稽古に邁進したいと思えます。

濹川一流柔術初段 若狭 優貴



昇段審査会では、先生方より毎回お言葉を頂いております。今回、開会式では、上條先生より「段位は稽古の目安・手段に過ぎない」事を閉会式では、岡田先生より「気迫・目付・残心が武士にとって大切であり、袴の背板が腰につくような動きが出来る様になることが大切」と言うお言葉を頂きました。また、森本館長より総評として、「本質から外れていない動きでした。このまま稽古を続けてください。」とお言葉を頂きました。

今回の昇段審査会で学んだことを今後の稽古の糧として頂けたらと思えます。

(文責 片岡 潤一)